



## 「天球で考える地球の運動ほか 天文ビデオシリーズ」

学研ビデオ教材 中学校理科第2分野3部作  
定価 各24,000円、監修 高橋典嗣、指導 大越 治

ビデオ

お薦め度  
☆☆☆★★

世の中はパソコン流行りである。とある出版社で聞いた話だが、一般書籍よりもCD-ROMを絡めた出版のほうが売れ行きがよいそうだ。確かに家庭でパソコンをいじり、レポートをワープロ打ちして提出する中学生や高校生も増えている。教員や子どもたちが個人的に楽しむにはパソコンソフトやインターネットはとても面白い。しかし、学校の日常の授業でパソコンをまるで文房具や顕微鏡のように自由に使いこなせる環境の教員は圧倒的に少ない。パソコンやインターネットはまだまだ発展途上の視聴覚機材なのだ。どこの中学校でも、どんな教員でも簡単に使いこなせる視聴覚教材は今でもビデオソフトである。従ってさまざまなビデオソフトが学校現場で使われている。

学校教育に利用されているビデオはその利用目的から2つの種類に大別できそうだ。一つは、その分野での最先端の知識や映像を扱い、教室での学習の意味づけや学習目的を描き出すもの。例えば、好評の宇宙科学研究所ビデオシリーズや国立天文台でもシリーズ化が始まった「ようこそ国立天文台へ」などがそうである。これらは、学習指導要領とは何のことも、とても中学生には理解不能な概念や専門用語も登場する。でも、観ている子どもたちの知的好奇心をくすぐって、学ぶ楽しさを伝えることができる。このため、その単元の導入や発展として利用されている。

もう一方は、学習指導要領に準拠し、教科書で教えようとしている知識や概念の理解のための補助教材としてのビデオ。特に天文分野の学習内容の理解には、その映像が不可欠な場合が多いため、実際の観察の補助としてよく利用されているようだ。例

えば、好評の「宇宙～地球と太陽系～」全5巻や「四季の星座とその観察（監修：渡部潤一）」全6巻（共にTDKコア）、今回紹介するビデオシリーズなどがそうである。内容は基礎的でどちらかというところ地味だが、観ていると学習している内容がよくわかる。前者はたいていの場合研究者が中心になって制作し、後者は教員が中心になって制作している。両者の特徴を理解して利用することが大切である。よいビデオが増えたかからと言って、間違っても実際の観察を手抜きしてビデオ学習でお茶を濁すことのないよう自戒したい。

さて、このシリーズは、「天球で考える地球の運動」「日食、月食で考える太陽・月・地球の運動」「観測とシミュレーションで考える惑星の運動」と中学校の現在の学習指導要領の内容にそって、とても丁寧にそれぞれの現象を説明している。時間も授業中に利用しやすいようそれぞれ14分、13分、12分と短くコンパクトに編集されている。あえて、流行のCGを使わず、大きな地球儀上に取り付けた小型カメラからの撮影で、自象（地上から見た天球の動き）と他象（宇宙から見た地球の動き）を再現しているところが秀逸である。制作者たちの職人的教育者気質を感じ取ることができる。

このビデオにはHSTなどの最新天体画像は登場しないし、最新の話題も登場しない。一般の人が買うことはまずないだろう。しかし、中学校の授業では役に立つビデオである。難を一つだけ言うなら、十分の一程度の価格で販売してほしかったと思う。今後の教材会社の努力をお願いしたい。

縣 秀彦

(東京大学教育学部附属中・高等学校)